

Title	『大学改革にさいし図書館にのぞむ』を読んで - “ 図書館員の声 ” 特集号 -
Author(s)	今井, 敏子
Citation	静脩 (1971), 7(5): 4-4
Issue Date	1971-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/36625
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

が図書系に多いというのはこのことを端的に示していると思う。

理学部地質学・鉱物学教室 今井敏子

先に掲載された利用者の声に対し図書館員として考えるということですが、利用者の声を全く否定した考えは出て来ませんし、むしろ利用者の声に私達がどう応えるのかということが改革の一部につながるものと考えます。唯、一方的な利用者の押しつけのみの声は合理化につながるものとして反撥を感じます。

理・工学部のように各教室毎に図書室のあるところでは、今進められようとしている本館の構想からは全く隔離されたところでもあります。特に理学部の現状をみても、4年前の「静脩」3巻1号(1966年)の東西南北・理学部の教室図書室の紹介が掲載されているのを読み返してみても、今は外見的には建物が新しくなり、閲覧室が明るくなった程度で、職員の数も数学教室を除いては全然増えておらず、複写の業務が増えただけ労働強化を強いられている現状です。

昨年来の紛争後、理学部では教育改革が行なわれ今までの3・4回生の教室への分属制度はなくなり、数学系・物理系・生物系の三系列になり、学生はそれぞれの教官群に登録するのみで、講義の選択は自由、またどこの図書も利用できるということになりましたが、現在の各教室での蔵書は内容的には教官のための研究用図書が多く、学生のための教育用図書が少ないことが問題になっています。せめて学生用の図書館が一つ理学部にあってもよいのではないかという希望は出ているが、実現のためには、基準面積、予算、北部分館計画等困難が多々あります。年度当初にせめて登録事務、学部内の目録室等の計画は少し話し合われましたが、立消えになっています。今、全国的に問題になっているコンピューター等機械化も学部内では遠い話で、そのことが合理化につながるのだという討議も頭の上を素通りしてゆくのみで、黙々と手工芸家が自分の技術を磨くようにこつこつと仕事をしているのが私達の現状で、そこからの改革案を考えると、予算・人員での行きづまりの壁の厚さをつくづく考えさせられます。

教養部 井狩らく子

“図書館は研究水準のバロメーターである”と、ある大学の図書館職員になったとき教えられた。まさに“利用者の声”特集号によれば、多くの研究者・学生が異口同音に情報化時代にふさわしい図書館を要求されているのは当然である。

当教養部の現状をみる時、諸氏の要求には遠くおよばない。図書室は研究、教育、学習の目的を遂行するに必要な基本的な機関であり、大学図書館設置規準でも、最低の規準が示されているが、70余年を経た建物にはそれさえも整備され得ない。例えば5,000余人の学生数に対し200席たらずの閲覧席。さらに閲覧室のスペースの関係から開架方式さえ採用され得ない状態である。(単なる1例である)

一方財政公開の前進によって予算は上積みされた。必然的に研究、学生用図書は増加した。それにたいし職員数は15年間据えおかれ、今なお増員要求が受け入れられない現状では、教官ことに学生にその不便がはねかえっている。

図書館が奉仕機関であるから、あるいは世界情勢に即応して、ということで直ちに機械化を受入れるには利用者からの提言にもあるように問題がありそうである。大学図書館職員は自らの労働を学習し、あらゆる側面から機械化の問題を検討していかなければならない。